発 言 通 告 表 （一 般 質 問）

令和元年９月定例会

順位	氏名（議席）	発　言　の　要　旨	答 弁 者
1	遠藤　盛正（１４）	１．富士市の高齢者在宅医療・在宅介護の現状について 　これまで、高齢者の支援や介護施策については何度か質問をさせていただいてきました。国が2000年に介護保険制度を創設してから、高齢者の終末期医療の場を病院から自宅に移行させる方針を明らかにして、20年がたとうとしています。 　今から、70年ほど前の1951年ごろは、自宅で最期を迎える人が大部分で、病院や診療所で亡くなる方は全体の１割にすぎなかったようです。それが今日では、逆に８割以上が病院や診療所で最期を迎えていて、自宅で亡くなる方は、約１割になっています。 　在宅死と入院死が逆転したのは、45年ほど前の1975年ごろからで、医師が自宅に訪ねてくる光景が少なくなり、現在、50歳代以下の人たちは、老衰やがん末期などの患者は、病院で亡くなるのが当然だと思っているのではないでしょうか。 　このような状況の中、国は2000年代に入り、終末期医療と介護の場を病院から、自宅に移行させる方向に大きくかじを切ったのです。私以上の年代の方は、往診と言えばすぐにイメージできますが、若い人たちにはほぼ、死語となっている今、訪問医療、訪問介護という表現に変わっています。要は、「これからは、自宅でなるべく面倒を見なさい」ということです。大変な制度改革の中、私たちの意識改革が余儀なくされているのです。 　厚生労働省の発表によると、現在、我が国の65歳以上の人口は3000万人を超えており、国民の４人に１人となっています。2042年の約3900万人でピークを迎え、その後も75歳以上の人口の割合は増加し続けることが予想されています。 　そのような中、団塊の世代、約800万人が75歳以上となる2025年以降は、医療や介護の需要がさらに増加することが見込まれています。言うまでもなく、これが2025年問題です。私たち富士市でも直面する大きな問題ですので、これまで何度も取り上げさせていただいております。 　富士市として、財政の圧迫が少しでも軽くなり、若い人たちに高齢者が邪魔者扱いされないように、高齢者を取り巻くシステムの充実を他市よりも早く確立をしていただきたいと考えているからです。 　この間、2015年には認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）が策定され、５年が経過しようとしています。 　これ以後、国からはさまざまな施策や、制度の改正が次々と打ち出されました。市町村には、2025年に向けて３年ごとの介護保険事業計画の策定、実施を通じて、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じた、地域包括ケアシステムを構築することとしていますが、内容について、何一つ明	市　　長 及　び 担 当 部 長

順位	氏名（議席）	発　言　の　要　旨	答弁者
1	遠藤　盛正（１４）	確な指示がないままで、これまで地方行政は振り回されてきたことも事実です。 　そこで今回改めて、富士市として増加する高齢者が必ずかかわるであろう、在宅での医療・介護について、何ができていて、何ができていないのか、行政としてどこを目指しているのか明確にすることにより、市民に理解と協力がお願いしやすい行政としての環境づくり、必要があれば、富士市独自にでもシステムづくりをしていただきたいと思い再度の質問に至りました。 　とはいえ、高齢者施策といっても幅広い分野に渡ります。今回は富士市の在宅医療と在宅介護の現状についてお伺いたします。在宅医療・介護を進めて行くには、まず、押えておかなければならないポイントが幾つかあります。最初に、在宅医療・介護を支える、かかりつけ医を見つけることが重要となります。そのためには、①地域包括支援センター、②各地域の医師会、③訪問看護ステーション、④病院の地域医療連携室、⑤居宅介護支援事業所、⑥在宅療養支援診療所・病院などの充実と連携が必要となります。 　そこで、以下質問させていただきます。 (1) 市内９病院で構成される富士市病院相互連携会議が発足されましたが、高齢者医療・認知症の取り組みは考えられているか。 (2) 市内の訪問看護ステーションは、どのような現状にあるとお考えか。 (3) 富士市立中央病院、共立蒲原総合病院の地域医療連携室と市内の地域包括支援センターとの連携はできているのか。 (4) 市内居宅介護支援事業所のケアマネジャー業務の現状をどのように把握しているか。 (5) 高齢者の暮らしを支える、富士市生活支援サービスのうち、紙おむつの支給状況は、どのようになっているのか。 ２．富士市の認知症サポーター養成講座の受講状況について 　現在、富士市では２万人を超える、認知症サポーターの登録があります。認知症サポーターの役割としては、認知症についての正しい知識と理解を持ち、認知症の人やその家族を温かく見守る応援者のことです。認知症は誰でもなる可能性があります。他人事として無関心でいるのではなく、「自分の問題である」という意識を持つことが大切として、認知症サポーター養成講座が開かれています。 　そこで、ここまでの現状について伺います。 (1) 現在までの富士市の認知症サポーター数は予定どおりか、また、今後の目標として、いつまでに何人にする予定か。 (2) 富士市は高齢者支援から見た、認知症サポーターの役割をどのように考えているか。	市長 及び 担当部長